

あそぶ・まなぶ・語る

周防大島町総合体育館陸上競技場 / 日本ハワイ移民資料館
八幡生涯学習のむら / 宮本常一記念館

第49号
2025年2月

宮本常一記念館

展示室

リニューアル



令和6（2024）年12月7日に、宮本常一記念館の展示室をリニューアルオープンしました。当館で保管し、展示している資料には、「文書資料」「蔵書資料」「写真資料」「民具資料」がありますが、それら



をまとめて「宮本常一関係資料」と総称しています。今回のリニューアルでは、この一連の資料を通して、宮本常一と周防大島のことが体系的に分かるように設計しました。展示ブースは次のとおりです。

宮本常一を知る 宮本のイントロダクションとして、生い立ち、周防大島の風土、

幼少期、小学校教員時代、民俗調査の足跡、地域振興活動などを紹介しています。

宮本常一の書斎 宮本の遺品（机・椅子・本棚・鞆・カメラ等）や自筆原稿を展示し、彼によるフィールドワークとデスクワークの様子をイメージできるようにしました。（写真①）

宮本常一の絵画資料 主に幼少期に周防大島長崎（現在の道の駅付近）周辺で描いた絵画を展示しています。

宮本常一の文書を調べる 宮本による聞き書きや古文書等の筆写資料を展示し、そこから読み取れる日本各地の農山漁村の生活文化を紹介しています。（写真④）

宮本常一の蔵書を読む 宮本の著作を含む蔵書を展示し、併せて蔵書に施された線引きや書込みを示しながら、彼の着眼点や思索のプロセスを紹介しています。

宮本常一の写真を見る 宮本が撮影した写真の特徴と傾向、社会的意義、写真からうかがえる周防大島の暮らしを紹介しています。また展示室の上方には、彼が各地で撮った写真を絵巻物風に掲示しました。

宮本常一の民具学 宮本が取り組んだ民具の調査と収集活動、彼が考案した民具の「機能分類」などを紹介しています。

島の生産活動と生活 周防大島の各地で町民から寄贈を受けた農耕用具・漁撈用具・

運搬用具・食用具等を展示しています。併せて、宮本が民具について撮影した写真や解説した文章を示し、民具の使用状況等を具体的にイメージできるようにしました。（写真②③）

周防大島長崎の海と暮らし 宮本のふるさとである長崎の、海を舞台とした暮らしを聞き書きの形式で紹介しています。

地域交流企画展示 当館地域交流員による調査研究の成果です。第1回は内本良夫氏による「石垣に学ぶ周防大島」で、今後年1回の頻度で更新していきます。

今回リニューアルした展示を通して、宮本常一の学問的な魅力、そして周防大島をはじめとする農山漁村の生活文化の多様性と可能性をともに感じただけだと幸いです。（板垣優河）



ハワイ移民から 寄贈された 電気オルガン

涯ら
生む
幡の
習学

久賀歴史民俗資料館には様々な民具が保存されていますが、その中に古いオルガンがあります。このオルガン、ほかのオルガンと違って

のは電気オルガンというところ。普通のオルガンはペダルを足で踏んで風を送り、音を出すしくみになっていますが、このオルガンは電気で風を送るようです。オルガンには「寄贈 ホノルル 新田一」と書かれており、ハワイに移民された方からの寄贈品とわかりま



す。当時の最新型のオルガンだったのでしょうか。コンセントを入れて鍵盤を押してみると、音が出ました！ 中には押したまま元にもどらない鍵盤や音が出ない鍵盤もありましたが、なんとか使えそうです。しかし寄贈時の記録がなく、寄贈者や寄贈された事情などはわかりま

せんでした。日本ハワイ移民資料館の協力でホノルルの新田一氏について調べたところ、明治35（1902）年にハワイに渡った久賀出身の「新田萬太郎」氏に行きつきました。萬太郎には男の子二人と女の子四人の子どもがいることもわかりました。もしかしたら一氏は萬太郎の息子の一人かもしれない。

今のところこれ以上はたどれず、オルガンについても調査を、と思っていたある日、高齢者施設の方々が久賀歴史民俗資料館を見学されました。電気オルガンは足を使わないので車いすの方も演奏することが出来ます。昔オルガンを弾いたことがあるという方が「きらきら星」「おおスザンナ」と代わるがわる演奏されると、とっても上手！ 鍵盤がもどらないのも笑いをさそい、手拍子をされる方もいて皆さん楽しい時をすごされました。今後は、オルガンの調査とともに調整も検討する予定です。（古賀瑞枝）

下半身を鍛える！ レッグエクステンション



「レッグエクステンション」は、椅子に座った状態から膝の曲げ伸ばしを行い、太ももの前側を中心に鍛えることができる下半身トレーニングのマシンです。筋肉量が増えると代謝がアップし、動かない状態でも消費されるカロリーが増えるなど、痩せやすくなる効果や免疫力強化が期待できます。

普段使っていない筋肉をまんべんなく刺激し、足の筋肉をつける筋力トレーニングなどを行うことにより、階段の昇り降りがスムーズになり、歩く時の歩幅が広がって歩行が安定する効果があります。また、歩行動作の安定や起立動作や着席動作の安定、膝の動きの安定を引き出します。歩行機能の維持・強化・転倒

を予防できるため、高齢者の方にもおススメのトレーニングです。マシンの使い方に不安な方は、専門スタッフが機械の使い方、トレーニング方法についてアドバイスをいたします（要予約）。

なお、初めての方は初回講習会の受講が必要となっております。事前にスケジュールをご確認ください。見学は自由ですのでお気軽にお立ち寄りください。皆様のご利用をお待ちしております。

トレーニング室概要

【料金】 1回220円

【設備】

- 有酸素運動系…エアロバイク、ランニングマシン等
- 筋力トレーニング系…チェストプレス、ショルダープレス等
- ストレッチ系…ベルトマッサージ機、ストレッチマット等

そのほか血圧測定器、体脂肪計、無料ロッカールーム、シャワー（別途220円）があります。

【時間】 9時～21時（金・土・日・祝は17時まで）

【問合せ】 0820・78・2512

アリゾナからの 問合せ



アメリカのアリゾナ州Mさんから送られて来た一通のメールの問合せから、私たちの調査は始まりました。問合せは、

「7月に貴資料館を訪ねます。私の曾祖父母は平生町の出身です。祖父はアメリカ生まれですが、幼少期を兄弟姉妹と一緒に6年間、平生町で過ごしました。彼の祖父が世話をしてくれました。今回の来日で是非調べたい事があります。祖父には日本に兄が居ましたが若くして亡くなりました。しかし彼には息子が一人いると聞いています。その息子Yさ

んが1960年代、横浜に立ち寄った停泊中の船に乗っていた私の父に会いに来てくれたそうです。あいにく仕事の都合で会った時間が短く、名前も聞いていなかったのです。父はその事をとても後悔しています。私たちも、祖父が生きている間にもっと日本の親戚のことを聞いておくべきだったと後悔しています。手を尽くして調べたのですが、アメリカにはその祖父の兄の記録が残されていないのです」



そのメールには、戸籍と日本から送られて来た昔の写真が数枚添えられていました。有力な手掛かりは、その写真の裏に書かれていた日付と場所、そして名前でした。「これらの写真は祖父が大切に保管していたものです」と書かれていました。

私たちはその数枚の写真と裏書きを調べ、数日かかりましたが、なんとか読み解くことが出来ました。裏に書かれていた日本語が本当に役に立ちました。また、故郷が平生町という近隣の町であった事も幸いし、Yさんと連絡を取ることが出来たのです。80歳台後半になっておられましたが、ハワイ・アリゾナに渡った親戚の事は良く覚えておられて、アリゾナからの疑問に全て答えを出してくれました。

最初は平生町から親戚の何人かでハワイへ移民し、後にアメリカ本土へ渡り、アリゾナで花の栽培ビジネスを興し成功しました。何度か日本の故郷へ帰り、宴会を開いて親戚の人たちと語らい、町の成功者と言われていたそうです。

約束通り、7月にアリゾナからMさんが来館されました。平生町のYさんご夫婦が彼を自宅で温かく迎えてくれました。初対面の3人でしたが、Yさんご夫婦が移民した方たちとの昔話を沢山してくれました。親族という繋がりを強く感じたひとときでした。Mさんは固く握手をして、「来年は父母、家族と一緒に来ます」

と言って帰って行かれました。皆さんの家族や親族の先祖に、外国に働きに行った人(移民)は居ませんか? その方が、いつ頃、何処へ行ったかご存じですか? 見知らぬ土地への移住、そのエネルギーは大きなものだったことが想像できます。その力は、きっと現在、そして未来へと繋がっていくと思います。Mさんのように先祖の足跡を確かめて後世に語り継ぐことをお手伝いするのも当館の重要な役割と考えています。(砂田信子)



評伝・宮本常一 第二回 ふるさとの生活



前回の記事では、宮本常一の生い立ちを紹介しました。宮本は明治40（1907）年に周防大島東部の長崎で生まれ、大正12（1923）年に大阪へ出るまで、そこで暮らしていました。今回は、彼が子どもの頃の生活を中心に紹介します。

宮本の生家は長崎の海岸にありました。『周防大島を中心としたる海的生活誌』では、「私の家は石垣一つで海と隣っていた。潮が満ちると、ドタリドタリと石垣の根を打つた。風のある日は沫が石垣を打ち越して屋根の上へげざと降った。北風の強い日などは、更に屋根を越えて、家の前の道に降った。かうしてシホケが上ると畑のものなどは潮枯れになる事があつた」と書いています。

下の写真は、昭和36（1961）年1月に宮本家の付近を撮影したものです。通常石垣の外側には砂浜が見え、潮がひくと砂浜の先には干潟が現れましたが、写真のように潮が満ちると石垣の下部まで海に浸かりま

した。石垣を打つ波の音は風向きによって変わります。この石垣は北面しており、北風を伴う波の音はドサリドサリと叩き付けるような音がしました。冬は北風が吹くたびに寒くなるので、この波音を聞いていると心がめいってきそうです。また、家の南側には下田八幡宮というお宮がありました。森に当たる風の音も風向きによって変わり、家に居てもそれが何の風であるか分かりました。『庶民の発見』では、そうした体験をもとに、「森に風のあたる音と波の音—それは私の气象台でもあつた」と書いています。

大正3（1914）年、宮本は西



【写真＝長崎の海に面した宮本の生家付近】

方尋常高等小学校に入学しました。「我が半生の記録」では「読方が乙だったので父に叱られた。読方はあまりすきでなかった。一番すきなのは絵で、学科に絵はなかったが、よく描いた」と記しています（『父母の記／自伝抄』）。左の絵画は宮本が大正9（1920）年8月に真宮島を描いたもので、右上には先生が朱書きで「甲」の評価を付けています。



幼い頃の夢は文学博士になることでしたが、家の事情で中学校へは進学できず、当時2年制だった小学校高等科へ進み、国民中学会の講義録をとって勉強しました。（板垣優河）



【写真＝佐連 昭和35（1960）年 浜本栄撮影 周防大島町教育委員会蔵】強い西風で荒れた波は波止場を乗り越え、道路や家を叩きつけた。“だれもがずっと安全に暮らせて、災害にも強いまちをつくる”こともSDGsの目標のひとつ。

SDGs（持続可能な開発目標）とは、すべての人々にとってよりよい、より持続可能な未来を築くために2030年までに達成するべき世界共通の目標です。新しい考え方のようですが、昔の暮らしを見てみるとSDGsの考え方に通じる暮らし方を発見することができます。今回の企画展では、明治から昭和30年代頃の周防大島の暮らしからSDGsを考えます。（古賀瑞枝）

【期 間】1月28日（火）～3月23日（日）

【時 間】9時～17時（入場は16時まで）

【場 所】学びの間

【問合せ】0820・72・2601